

巻 頭 言

言葉の教育とは、子どもたちに言葉とその枠組みを通じて社会化することであると同時に、その社会を言葉によって批判的に捉えていくための力を育むことである。それはまた、教育者としての立場からみれば、私達がふだん用いている言葉の意味そのものを、学習者との対話を通じてそのつど確認し吟味する営みでもある。

この言葉の教育がもつ意味は、現在の国内外の情勢下でいっそう深刻な重みを増しているかに見える。人間の「尊厳」や「自由」「平等」、社会における「公正」といった歴史的に発見され獲得されてきた理念を、人間が様々なかたちで動揺させ解体させていこうとする動きが、日々報道されている。そこには、2400年以上前に生じたギリシアでの覇権をめぐる戦争・内乱の姿を描写した同時代人の厳しい視線を、重ね合わせることができるかもしれない。

「やがては、言葉すら本来それが意味するとされていた対象を改め、それをを用いる人の行動によってべつの意味をもつこととなった。たとえば、無思慮な暴勇が、愛党的な勇気と呼ばれるようになり、これに対して、先を見通して躊躇うことは臆病者のかくれみの、と思われた。」
「何ごとによらず、人の先をこして悪をなすものが賞められ、悪をなす意図すらないものをその道に走らせるのが、賞揚に値することとなった。」

(トゥーキュディデース『戦史』中巻、久保正彰訳、岩波書店、1966年、pp.100-101.)

もちろん、アテナイの民主政に批判的だったこの筆者の言葉を完全な事実と受け取る必要はないし、その何度目かの再来であるかのように現代のいわゆるポピュリズムを嘆く必要もない。どれほど重大な問題であってもこれを真摯に捉え解決に向けて協働できる力が人間にあり、その力を育むことができるという希望こそが、教育を支える基盤であるからだ。

その基盤に拠りつつ教育・学習の再検討を進めていく場として、『学習開発学研究』は今回第17号を迎えた。引き続き、皆様からのお力添えを頂戴できれば幸甚である。

最後に、学習開発学領域を長きにわたり支えてこられた栗原慎二教授が、今年度末に定年退職されることとなった。ご健康とますますのご発展を、感謝とともに祈念申し上げます。

令和7年3月

広島大学大学院人間社会科学研究所
学習開発学領域主任
山内 規嗣